

2021年

5月第1・2週の礼拝説教要約

・5月2日：ヨハネ福音書3：3-13.

『新たに生まれる者』

・5月9日：ヨハネ福音書3：16-21.

『信じる者の命』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

『新たに生まれる者、信じる者の命』

祭司ではなかったものの、ファリサイ派で、ユダヤの指導者、長老でもありまた律法学者でもあったニコデモは、もしかしたらサンヘドリンの議員も兼ねていたのかもしれない、ユダヤ人の社会ではとても高い地位にある人物でした。しかし、それらの肩書きを持つ人々は、後に、ことごとくイエスとは対立することになるのです。ある夜、彼がナザレのイエスのもとを訪れたときのエピソードが、ヨハネ福音書の3章に記されています。

イエスの弟子達が応対しかねたのかどうかはいざ知らず、夜の訪問者はこの時、イエスに直接、面会することが許されたようです。当時の対話の正確な所要時間は不明ですが、もしかしたらもっと時間の掛かる対話だったのかもしれない。

ニコデモはなぜか自信をもって、イエスが「神のもとから来られた教師であることを知っている」旨を伝えます。神が共におられるのでない限りイエスの為さる言動は説明がつかないと。イエスの公生涯の初期に、これほど深くイエスの本質を言い当てた人は他にはいません。イエスの弟子達でさえも、まだ気が付いていないことでした。

けれども、これに対するイエスの返答は、意外にも、素っ気ないものとして記されています。「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」、これが、イエスの本質を見抜くことよりも、はるかに大切なことであると。

イエスからイスラエルの教師と呼ばれたニコデモは、イエスの神秘性は認めつつも、お互いがなおも同業者として語り合える可能性を模索しつつ対話を続けます。「新たに生まれる」という言葉がいったい何を意味しているのか、そこが知りたいニコデモは、その真意をはかりかねて、敢えて愚問を呈します、「年をとった者がどうして…もう一度、母の胎内に戻って生まれることができますよう？」

すると、これに対するイエスの答えは、前よりも、はるかに謎めいたものとなります。「誰でも、水と霊とから生まれなければ、神の国に入ることはできない」。神の国を「見ること」、さらにそこから神の国に「入ること」へと、イエスの答えは進みます。これが、新たに生まれる者がたどる道なのだ、「驚いてはならぬ」と。

ニコデモは理解不能に陥りました。彼が最後までイエスの言葉に耳を傾けていたのか、それともどこかで見切りを付けて退散していたのかは何も記されてはおりません。

いずれにしても、イエスはユダヤの知識人たちが「天からの」真理を拒み続けていることについて言及します。あなたも同罪ではないかと。

ただ、イエスはそんな頑迷なニコデモをも拒絶することもなく、彼に、神の奥義を告げしらせるのです。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

この言葉こそ、神の子が人類に与えた最高のメッセージです。イエスはその言葉を、他ならぬニコデモに対して、惜し気もなく開示しているのです。

ヨハネ福音書の著者がその時に、傍らで話を聴いていたのか、それともイエスが別の機会にも同じことを語ってくれたのか、今となっては分かりません。ただ、相手が「天からの」真理を受け入れることを拒む人物であったとしても、分け隔てなくイエスは、その人に、神の奥義を告げしらせているのです。

この聖書を手にする人々は、誰もが自分とニコデモとの共通点を感じ取ります。イエスの使徒たちのように直接召集される者が、その後、出現していない以上、自らの決断にもとづいてイエス・キリストを受け入れる者の思いには、必ずニコデモの思いと相通するものがあります。

この夜、彼の目の前にいたのは、紛れもない神の独り子、イスラエルが久しく待ち望んだ主、永遠の命を与えるメシア＝キリストだったのです。